

月の花挽歌 ～1.予期せぬ出来事～

1-6

「貴女のようなワインを選んだようだ」

辰巳は、わざとらしく放言すると、口に含んだワインを舌で転がした。

「あら、そうでしょうか」

真紀は逆らわずに受け流した。

ゲスト二人の眼が笑っているのを窺ったソムリエは軽く頭を下げて、その場を離れた。

真紀は横恋慕した情人が残して逝った会社の後々について、辰巳に相談してみようとしていた作意を後悔し始めていた。ところがアワビのオイスター煮込みと白ワインの絶妙なマリアージュに加え、会話の端々に俗気まじりの色好みが見え隠れする男のセンスを目の当たりにして、やはり自分の感に狂いはなかったと安堵していた。

気持の振幅を、異なることが一遍に収束させたことに戸惑いながらも、以前にも似たような事象があって、真紀はそれが何であったかを思い出せないままに、ご託宣が下りたような吉兆とみなす先触れだと思うことにした。

思案気な面持ちの真紀に、「心ここに在らず」と辰巳は言って、丁度現れたソムリエを制すると、自ら真紀のグラスにワインを注ぎいれながら、呪文を唱えるように揶揄した。

「すみません。トリップしてしまいました」

真紀が神妙な顔で言い訳をする。

「ふーん。ワインに一服盛られたのかな？」

辰巳はことさら心配振ってから、おもむろにソムリエを呼んだ。

「辰巳さん。ご相談があります」

真紀は改まった口調で卒然と言った。